

東京学芸大学大学院
教育学研究科（修士課程）
教育支援協働実践開発専攻



教育協働研究プログラム ガイド

「教育の未来構想」を先導する、
高度な教育者、研究者を目指せ！

この大学院のプログラムは、学校が必要とする学校外の教育資源を、自身の社会教育・生涯学習・芸術・スポーツ・行政・法務等の専門的知識を通じて、学校と連携・協働しながら活用し、教育の社会的ネットワークを構築しつつ教育改革を先導する人材の養成を自的とします。

教育協働研究プログラムガイド

CONTENTS

1. めざす力と研究デザイン
2. 教員の専門領域
3. 協働性を高めるカリキュラムの特徴
4. 教員の紹介
5. 教員からのメッセージ

東京学芸大学 大学院 修士課程の組織・編成

修士課程の組織・編成は、下図に示すように、次世代日本型教育システム研究開発専攻、教育支援協働実践開発専攻の2専攻があります。その教育支援協働実践開発専攻の中に、教育AI研究プログラム、臨床心理学プログラム、そして教育協働研究プログラムがあります。

修士課程 [2専攻]

次世代日本型
教育システム
研究開発専攻

教育支援協働実践開発専攻

- 教育AI研究プログラム
- 臨床心理学プログラム
- 教育協働研究プログラム

2つの専攻どちらでも留学生を受け入れます

ようこそ皆さん、教育協働研究プログラムへ

はじめに

東京学芸大学の教育学研究科修士課程は、これまでの本学修士課程の内容を発展させ、「教育の未来構想」を先導するためのグローバル、教育AI（人工知能）、臨床心理、教育協働などの、これからの社会で求められる先端的な「プラス α （アルファ）＝テーマ」に焦点を合わせ、その内容を教育の側から改めて捉え直すとともに、それら「プラス α ＝テーマ」の専門性をも兼ね備えた、総合的で新たな能力を身につけた教育者・研究者を育てることを目指しています。

この「プラス α ＝テーマ」に応じた4つの内容の一つ、それが「教育協働研究プログラム」です。ここでは、その概略を説明していきましょう。

1. めざす力と研究デザイン

教育協働研究プログラムでは多様な専門分野にわたる教員の下でそれぞれの専門性を高めつつ、領域横断的なカリキュラムを通して学校教育に迫る3つの力を自分のものとすることを目指しています。



① 教育ネットワーク力

学校教育の課題を把握し、その適切な解決策を構想し、それを実現するために学校外とのネットワークを組織できる力



② 教育改革推進力

学校教育支援のための専門的知識を、学校教育の場で、実践的に展開し、教育改革を推進できる力



③ 教育支援モデル開発力

これまでの学校教育支援のあり方を批判的に研究し、新しいモデルを開発し、国内外に活用・普及できる力

この3つの力のうち一つを深堀するフォーカス・スタイルで学修・研究を進めるか、二つ三つと重ね合わせたハイブリッド・スタイルで学修・研究を進めるか、指導教員が皆さんに伴走しながら学修・研究デザインを描いていきます。

2. 教員の専門領域

教育協働研究プログラムを担当する教員の専門領域は次の9つにわたっています。指導教員が決まると、その専門領域は指導を受ける学生が基盤とする学修・研究の領域となります。各教員がどの領域で、どのような研究を進めているかについては、「教員の紹介」頁や教員の関わるWebサイトを参照してください。

生涯学習

すべての人の学び合いを支援する実践を攻究

君塚／前田／柴田／倉持／大森

文化遺産教育

文化財に関する専門的知識を深め、学校や社会に貢献する人材を育成

日高／新免／服部

ソーシャルワーク

人々の生活課題への取り組みとWell-Beingの実現を支える専門性を追求する

加瀬／内田／梅山／露木／角田

生涯スポーツ

スポーツへの多様な関わり「する、見る、支える、知る」を科学して、スポーツの持つ文化的価値を追求する

久保田／森山

多文化共生教育

言語と文化の網の目から、グローバル社会における共生のあり方を考える

范／小澤

表現教育

演劇、音楽、ダンスなどの舞台芸術表現活動を取り入れた芸術教育、コミュニケーション教育、ワークショップを探究する

中島／高尾

アート

演劇・映像の力を考える

近藤／畑中

デザイン

好奇心と行動力が鍵となる

鉄矢

教育行政

すべての人の育ちと学びを支える社会の仕組みについて考える

佐々木／前原／岩田／上杉／末松

3. 協働性を高めるカリキュラムの特徴

その1

教育協働研究プログラムのカリキュラム構成は次のようになっています。
(教育支援協働実践専攻を構成する他のプログラムと同様です。)

① 専攻基盤科目

「教育支援協働学概論」「教育コラボレーションと現代社会」
「教員の社会的役割とキャリア形成」の3科目
(専攻共通・必修6単位)

② 専攻基礎科目

「教育ネットワーク論」の1科目(プログラム共通・必修2単位)

③ 専攻展開科目(開設科目のなかから選択10単位)

④ 専攻発展科目

「フィールド研究」(選択必修8単位) 「特別研究」(必修4単位)

この中で、教育協働研究プログラムの特徴となっているのが③と④における**領域横断的な科目設定**です。

(1) 教育協働研究プログラムにおける専攻展開科目の特徴

教育協働研究プログラムの専攻展開科目は次の3つの領域から構成されています。そして各領域から必ず1科目・2単位以上を履修し、合計で10単位以上を取得することになっています。

その目的はまさに深い専門性と幅広い視野を持つ中で、3つの力(教育ネットワーク力・教育改革推進力・教育支援モデル開発力)を追求してほしいからにほかなりません。

① 教育環境領域(22科目開設)

豊かな学びを促進する教育の環境整備に関する高度な知識や技能の領域

② 地域創生領域(23科目開設)

ダイバーシティに対応する地域創生に関する高度な知識や技能の領域

③ 教育法規・行財政領域(10科目開設)

学校を中心とする制度的教育基盤に関する高度な知識や技能の領域

3. 協働性を高めるカリキュラムの特徴

その2

(2) 専攻発展科目「フィールド研究」の特徴

修士課程全体の特徴の一つに〈サービス・ラーニングの視点を導入〉があります。これはフィールド研究を中心として、社会実践活動と学修活動を両立させる方法であり、より主体的で実践的な学びを展開しようとするものです。

教育協働研究プログラムではこのフィールド研究にも領域横断的科目設定の視点を導入しています。具体的には1年次秋に履修する「フィールド研究N」を1か所のフィールドに限定するのではなく、3つのフィールドに分割して実施することにしています。そして2年次春に履修する「フィールド研究O」ではその学びをベースにフィールドを1つに絞って展開していきます。その理由は専攻展開科目と同様に「深い専門性と幅広い視野」をもって欲しいからです。

なお、3つのフィールドの分割方法は① 教育環境領域、② 地域創生領域、③ 教育法規・行財政領域のいずれかの中で3つのフィールドで行う場合と、二つまたは三つの領域に対応して複数のフィールドで行う場合の2種類があります。どちらの方法にするかは皆さんの学修・研究スタイルに応じて決めていくことになります。

修士課程ではまた、〈社会との連携・協働による研究・教育〉も特徴の一つに掲げています。フィールド研究は企業、行政、地域、学校などと強く連携・協働する中で、具体的な課題解決に結びつくことを意識した学びを展開するものでもあります。

教育協働研究プログラムの概要はご理解頂けたでしょうか。次ページからの教員の自己紹介とあわせ、その意図、特徴、そして魅力が伝わることを願ってやみません。



4. 教員の紹介 1 / 3

君塚仁彦 教授

KIMIZUKA Yoshihiko
博物館学 (博物館と教育
支援・地域博物館論)



現在、取り組んでいる研究テーマは、
①戦争・ハンセン病問題・災害の記憶
と博物館活動、学校教育支援、②美術
館と学校・地域における鑑賞教育支援、
③附属学校アーカイブズ論の3つです。
①は、学校教育・生涯学習の連携を念
頭に、戦争やハンセン病問題、3・11
の記憶・記録を援用した博物館活動・
教材開発・地域連携など、新たな道徳
教育への展開も視野に入れた実践的な
教育支援研究。②は、世田谷美術館を
フィールドに、教育支援者である学芸
員の職能論を絡めた学校・地域・大学
が連携する鑑賞教育支援に関する実践
研究。③は、本学大学史資料室・室員
の立場で、幼稚園を含む本学附属学校
園の基礎的なアーカイブズ研究という
こととなります。



前田稔 准教授
MAEDA Minoru
学校図書館学 / 学校司書論
/ 図書館の自由

学校教育における新しい学習指導要領
で中核的役割を果たす「主体的・対話的
で深い学び」の記述では、読書活動や情
報活用能力の育成、学校図書館の環境整
備が占める割合が大きくなっている。学
校図書館は、物語が好きな子供のみが利
用する場から、すべての子供の言語力・
読書習慣を確立する拠点として変化して
きた。また、物語だけでなく、ノンフィ
クションを教科・科目の授業と連動させ
ることが大きな課題となっている。暗く
静かな空間から、明るく賑やかな居心地
のよい場所へと展開しつつある。研究に
おいては、学校教育において、学校図書
館が提供するサービスの役割を明らかに
することを目指し、なかでも、個の自由
と関わる意義について考えているところ
である。

柴田彩千子 准教授
SHIBATA Sachiko
社会教育学 / 生涯学習論



地域に住まう人々が、地域づくりの当事
者意識を持って実践する多様な取組みの中
に内在する「学び」に、関心を持っていま
す。研究テーマは、地域社会のなかに「地
域の教育力をいかにして構築するか」とい
うことです。たとえば、家庭・学校・地域
(社会教育、NPO、企業等)の協働の在り
方、コミュニティ・スクールや地域学校協
働活動の動向調査、子育て中の母親や父親
の学びの実態や支援の方策について取り上
げることによって、「地域の教育力」を考
察しています。最近では、東日本大震災後
の子ども支援を行うNPOの事例調査、子
どものキャリア教育を支援する成人の学びに
関する調査、子育て中の母親に関する学
びのニーズ調査等を行いました。



倉持伸江 准教授
KURAMOCHI Nobue
生涯学習論 / 社会教育学
/ 成人教育学

成人学習論や支援論、社会教育職員論、
省察的実践論、組織学習論などを中心と
した理論研究と、社会教育実践、職員実
践、養成・研修実践などの実践研究を往
還している。一人ひとりの生き方が多様
化し、一方で地域課題・社会課題も複雑
化する中、生涯学習への期待はますます
高まっている。それとともに、主体的な
学び合いを引き出し(ファシリテート)、
つなぐ(コーディネート)学習支援者の
役割も重要になっている。最近では、社
会教育主事養成制度が改訂されたことと
関わって、実践的専門性を形成する養成
・研修カリキュラム、実習を軸とした学習
支援者の養成、生涯を通じた学習支援者
の力量形成、連携・協働による生涯学習
支援などについて主に研究している。



大森直樹 教授
OHMORI Naoki
人権教育 / 教育実践
/ 教育史

いま2つのことを研究テーマにしていま
す。1つ目は、3・11後の教育についての
研究です。具体的には、「被災校」や
「避難した子どもを受け入れた学校」の
教育実践記録の収集と整理を行い、震災
を忘れない取り組みの諸課題を明らかに
することです。2つ目は、戦後日本教育史
の研究です。とくに1958年に行われた
教育課程制度の再編の全体像について。
全体像に接近するために、この再編を、
戦後教育改革下においても行政裁量と中
央集権の理念を持続していた文部官僚の
役割、講和条約発効後に胎動した保守政
党の教育政策、戦争の時代にたいする悔
恨を熱源とした教育運動、という3つの側
面から把握することを試みています。

日高慎 教授
HIDAKA Shin
考古学 / 文化財科学



現在取り組んでいるのは、フィールド
ワークとして栃木県壬生町での国指定史
跡の古墳調査がある。壬生町と共同で、
学生とともに夏休みに発掘調査をおこ
なっている。私個人としては、日本の古
代について考古学を中心に研究しており、
交流や流通を物質資料から解明したいと
思っている。手工業生産品は当然ながら
生産地が存在するが、さらに供給先の遺
跡を見ていくことで、物流のルートを解
明できると考えている。また、古代の儀
礼についても研究を進めており、当時
の礼ひとの考え方や思想を物質資料から
考えたいと思っている。キーワードとし
ては、船、埴輪の生産と供給、道路、渡
来系文物、首長墓、首長居館、王権継承
の場などである。



新免歳靖 講師
SHINMEN Toshiyasu
文化財科学 / 考古科学
/ 窯業技術 / 地域文化
遺産の保存と活用

文化財科学とは聞きなれない学問だ
と思いますが、文化財を対象に自然科学
的な研究手法を用い、その製作や利用に
関する履歴を明らかにしたり、保存に役
立っている学問です。私は多様な文化財
の中でも主に窯業、特に古い時代の陶
磁器やガラス製品の製作技術を解明す
る研究を行っています。また、近年は、
地域にある文化遺産を保存するにあた
って、行政の力に頼るだけではなく、
地域住民の取り組みによって保存活用
する方法に関心を持っています。



服部哲則 講師
HATTORI Akinori
保存科学 / 修復科学

文化財の保存や修復に関し自然科学
的研究を行う保存科学、修復科学を専
門としています。文化財は歴史の記録
という人類共通の財産なのです。しか
し、文化財はただ放っておいただけ
では後世に残してはいけません。そ
の材料、材質、構造を見極め、必要
な強化処置や場合によっては修復を
行い、適切な保管環境の中、保存し
ていく必要があります。一方で、す
でに劣化してしまった文化財は修
復を行いその価値を取り戻す必要
があります。しかし、十分な材料、
製作技法などの解明なしでの修復
は、間違った価値を与えかねません。
このような劣化の予防や正しい修復
方法の選択のために、各分野の方
々と情報交換しながら取り組んで
いきたいと思っています。



加瀬進 教授
KASE Susumu
障害者福祉 / 地域福祉
/ 特別ニーズ教育

2001年に母校である本学へ赴任以
来、福祉Welfareと教育Education
をつなぐ多職種連携研究(自称WE
コラボ研究)を進めてきました。近年
はここに「教育支援(子どもを支援
する/教育者を支援する)/教育支
援人材養成」、「多様な学び(オル
タナティブ教育)と評価問題」及び
「子どもの貧困とチームアプローチ」
を重ね、「子どもの最善の利益」とは
何か、という問題に改めて分け入り
つつあります。特に現在、本学が進
める子どもの貧困研究プロジェクト
を率いており、経済的貧困×障害・
疾病(保護者含む)×環境要因がも
たらす社会的排除や社会的孤立の問
題にウェイトが置かれています。詳
しくは、なかなか更新されない研
究室ブログまで
→<http://www.we-collaboration.com/>(^_^)

4. 教員の紹介 2 / 3



内田賢 教授
UCHIDA Masaru
経営学／人的資源管理論

企業行動を分析する経営学のなかで、働く人について研究する人的資源管理論を専攻している。以前は海外進出した日本企業の現地での人事労務管理、最近は少子高齢化時代のわが国の高齢者雇用が研究テーマとなっている。わが国では現在、企業に対して60歳以上の定年制と希望者全員を対象に65歳までの継続雇用を求めている。加えて今年3月成立の改正高年齢者雇用安定法では70歳までの就業機会確保が努力義務として新たに求められるようになった。活き活き働く高齢者の職場（オフィス、工場、スーパー、社会福祉施設などさまざま）を訪ねて全国を回っている。



角田慰子 特任講師
TSUNODA Yasuko
知的障害福祉／障害福祉制度・政策史／グループホーム／地域生活支援

知的障害がある人たちの地域生活支援、とりわけグループホーム構想の成立史およびその担い手に関する研究に取り組んでいます。グループホームをはじめ、日本における知的障害者の地域生活支援施策は、脱施設化政策を推進してきた欧米の福祉先進諸国とは異なり、入所施設拡充路線が堅持される状況下において、きわめて脆弱な財政基盤のもとに成立し、展開されてきました。地域生活支援を志向する政策理念が標榜される一方で、その進展は長らく遅々たるものでした。こうした政策理念と実態のはなはだしい齟齬は、どのように生じたのでしょうか。その起源に立ち返り、検証することで、今日の課題の構造と今後の展望が見えてくることがあります。



范文玲 講師
FAN Wenling
中国近代文学／中国語教育

専門は中国近代文学で、郁達夫という作家の小説を中心とした研究を行っています。近年では日本と中国ともに中学3年生の国語の授業で扱う魯迅の「故郷」という作品の教え方の日中比較に関する研究調査を行っています。また、外国にルーツを持つ子どもたちに対する日本語教育や母語教育にも関心があり、昨年度は大阪の中学校や国際交流協会での母語教育に関する取り組みについて調査をしてきました。大学院の授業では、それらの子どもたちに対する日本語教育・母語教育の現状と課題を整理し、私自身の日本語獲得・母語保持の経験も踏まえながら、どのような支援ができるのかについて考えます。



梅山佐和 講師
UMEYAMA Sawa
子ども家庭福祉／司法福祉／スクールソーシャルワーカー

私は、とくに児童虐待や非行にかかわる子ども家庭への支援について、研究と実践からアプローチをしてきました。課題の解決緩和のためには、子ども家庭が「何に困っているのか」について、包括的にアセスメントを行い、それに基づいた手立てを考え、マイクロ・メゾ・マクロすべてに対して計画的に支援を展開することが求められます。また、子どもを中心とした多機関の連携協働が必要となります。

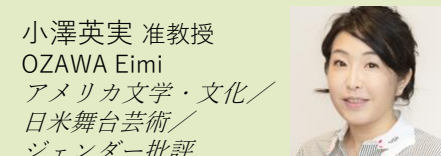
私は、実践経験を踏まえて、ソーシャルワークの視点から、施設や学校等の支援現場において、これらの包括的アセスメントおよびプランニング、チームアプローチを可能とするシステムの構築・定着について研究をすすめています。



久保田浩史 准教授
KUBOTA Hiroshi
コーチング論／体育・スポーツ測定評価／運動学／柔道指導論

スポーツパフォーマンス、心身の健康について、測定評価学を通して、科学的に追求します。経験、感覚に捕われ、真理が見えなくなってしまうように科学的分析を用いること、また、その逆、現場の感覚を大切にしながら、その感覚をいかに科学的に証明していくか、を考えています。また、私が専門とする運動種目が柔道なので、柔道の競技パフォーマンスの向上に関する研究や、柔道授業プログラムや、柔道を活かした運動プログラムを開発しています。

人々が心身の健康を保つために、スポーツ、運動は必要です。多くの人に生涯に渡ってスポーツ、運動に親しんでもらうように、様々なチャレンジをしています。スポーツ種目間や、スポーツと他分野のコラボレーションにも取り組んでいきたいと思っています。



小澤英実 准教授
OZAWA Eimi
アメリカ文学・文化／日米舞台芸術／ジェンダー批評

アメリカの視聴覚文化（文学、映画、演劇、TVなど）を、テキストと身体の関係から読み解くことを通して、社会や歴史の様態を研究しています。とくにフェミニズム、ジェンダー、クィアスタディーズの視点から、さまざまな作品の政治的表象を読み解くことにも力を入れています。これまでゴシック小説の研究から拡がり、ホラー映画における幽霊・ゾンビの表象を研究してきましたが、近年では日本の現代文学や小劇場演劇を中心としたパフォーマンス・アーツやサブカルチャーなども対象に含め、領域横断的に（雑食的・つまみ食いの）、文化のダイナミクスを捉えることを目指しています。



露木信介 准教授
TSUYUKI Shinsuke
医療ソーシャルワーク／ソーシャルワーク実践理論研究

「現代におけるソーシャルワークとは何か」というテーマを中心に、ソーシャルワーク実践における理論研究を行っています。また専門の領域は、保健医療分野におけるソーシャルワーク研究です。

近年の研究は、働く世代のがん患者へのソーシャルワークに関する研究や、「チーム医療」や「地域医療」などの多職種連携・協働（IPW）に関する研究も行っています。



森山進一郎 准教授
MORIYAMA Shin-ichiro
コーチング論／運動学／水泳指導論

技能獲得（主に初級、中級者）と競技力向上（主に選手）を中軸に据えた研究に取り組んでいます。私自身が主に取り組む研究は、水泳の初級・中級者向けの指導法と競技力向上を目指したトレーニング法の開発になります。研究手法としては、映像、力学指標や生理学の指標を主に用いています。所属大学院生は、水泳では、牽引泳を用いたトレーニング法（体育授業への応用も見据えて）や泳法技能を効率的に修得させる指導法の開発に取り組んでおり、水泳以外では、月経と運動パフォーマンスの関係、エネルギー供給系を向上させるトレーニング法の開発の他に、運動施設の居場所としての機能の検証やそこでの指導法の開発を研究テーマに取り組んでいます。



中島裕昭 教授
NAKAJIMA Hiroaki
現代ドイツ演劇／演劇理論／演劇教育

パフォーマンス研究の観点から、演劇と教育を再検討し、教育目的による演劇の社会的応用について、現代の教育と演劇の状況に応じた新しい基礎的な理論を構築しようとしている。現在、作業しているのは、演劇教育研究のための事典の編集。その他に、現代ドイツ演劇の翻訳上演への協力など。

4. 教員の紹介 3 / 3

高尾隆 准教授
TAKAO Takashi
演劇教育
／インプロ（即興演劇）
／演劇ワークショップ



演劇や音楽を中心としたパフォーマンス・アーツを教育活動にもちいる芸術教育実践、社会活動にもちいる応用芸術実践について研究している。現在の研究の中心はインプロ（即興演劇）と吹奏楽教育である。

インプロは、学校、劇場、企業、地域などでインプロ・ワークショップをおこなう。主宰するインプログループ「即興実験学校」ではワークショップをおこなうかたわら、舞台にも立つ。

吹奏楽教育は、ノーステキサス大学音楽学部吹奏楽研究室客員研究員、西湘吹奏楽コンクール審査員などを務める。2019年イーストマン音楽学校吹奏楽指揮マスタークラス参加指揮者に選ばれ、イーストマンウィンドアンサンブルを指揮。公立中学校吹奏楽部などの指導にあたりながら研究を進めている。



近藤弘幸 教授
KONDO Hiroyuki
シェイクスピア研究
／翻訳・翻案理論

研究対象はシェイクスピアです。彼の作品そのものの研究だけでなく、それがどのように日本文化に受容されてきたかに関心を持っています。最近、とりわけ、明治時代、シェイクスピアの作品に初めて接した人々が、どのように彼の作品を日本の文化の中に受け入れていったのかを研究しています。明治時代のシェイクスピア受容というと、真っ先に思い浮かぶのは坪内逍遙ですが、そうした「王道」の受容とは異なる、これまではほとんど研究されてこなかったチャンネル（新聞連載小説といった大衆的なチャンネル）での受容を掘り起こしていきたいと考えています。現代の日本文化（ハイカルチャーもポップカルチャーも）によるシェイクスピア受容にも関心を持っています。



畑中佳樹 教授
HATANAKA Yoshiki
映像・映画論／映画史
／アメリカ文学／
アメリカ文化

映画、すなわち映像による表現の過去（映画史）、現在（映画批評）、未来（映像論）について色々と勉強しています。また、もともとアメリカの文学、文化が専門だったので、ティン・パン・アライヤブルーズ等の歌詞の研究もしています。最近よく吹聴しているのは「ラヴ・ソングは奴隷の愛から生まれた」説です。

大学院の担当科目は、「学校教育と演劇・映像A」と「コミュニティ形成と演劇・映像C」です。これらの授業では、映画製作と学校教育、及び地域社会との関係性や可能性について考えていきたいと思っています。



鉄矢悦朗 教授
TETSUYA Etsuroh
デザイン（立体）／
デザイン教育

「あそびは最高の学び」という研究キーワードとともに、実践的なデザイン研究を主軸としています。当たり前を疑うアンテナを研ぎ澄ませ、コミュニケーション・生活・遊び、教育などを、モノづくり、コトづくり、バズくりに取り組みながら、デザイン・デザイン教育の研究を行っています。実践では公開制作やワークショップなどを通じた協働「共育」の機会を大切にしています。都内をはじめ、猪苗代、延岡、豊頃、掛川など様々な地域の人々と地域振興や産業の活性化、そして教育の活性化を目指しながら「共育によるまちづくり」活動をしています。

具体的な活動は 本学の美術科 環境・プロダクトデザイン研究室のHPで。



佐々木幸寿 教授
SASAKI Kouju
教育行政学／学校法
／学校法務

教育基本法をはじめとした教育関係法、学校関係法の体系、さらには近年、国内において重要な根拠法となりつつある子どもの権利条約の基に形成されつつある法制の研究を行っている。また、スクールロイヤー等の法曹専門家が学校教育に関わる動きが見られることについて学校法務という視点から研究を行っている。教育法制、学校法制は、教育行政システム（政治システムを含む）の変動が大きな影響を与えていることから、法制と関係にも注目した研究を行っている。

前原健二 教授
MAEHARA Kenji
教育行政学／教育経営学

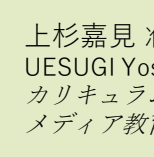


基本的に日本の教育に関する研究とドイツの教育に関する研究を並行して進めています。日本については、いったん企業等に勤務した後に教職に就いた「中途入職教員」についてのエスノグラフィックな研究に取り組んでいます。中途入職教員に期待する言説はたくさんありますが、実際の活躍ぶりはあまり知られていません。ドイツについては中等学校制度改革と教員研修改革の研究を進めており、年に2度ほど調査出張に行き、教育行政の担当者、教育研究者、教員研修講師の方などにインタビューをしたりしています。外国の事情を知ること、自分の考え方を相対化して視野を広げるためにも有効な方法だと考えています。



岩田康之 教授
IWATA Yasuyuki
教育経営学／教員養成論

教師になる者の学び（主に入職前の教師教育・教員養成）について、そのシステムやカリキュラムの研究をしています。日本の戦後改革期を中心とした歴史研究的なアプローチに加え、こしばらくは主に東アジア諸地域を視野に入れた比較研究的なアプローチも手がけています。近代国家の成立とともに教育制度が整備され、その担い手である教師を組織的に確保する必要が生じたわけですが、その教師のありようは、それぞれの地域における歴史的・文化的背景によって採取されており、それゆえ教師になる者に期待される資質や、その準備教育のありようも多様性を帯び、様々な課題を持っています。そのメカニズムの解明を中心的なテーマとしています。



上杉嘉見 准教授
UESUGI Yoshimi
カリキュラム論／
メディア教育学

私はおもに、現代の商業的な生活環境を扱うメディア・リテラシー教育について研究しています。最近、前世紀に北米地域で見られた、消費者教育領域での広告を取り上げた教材の分析にも取り組んでいます。このほか、メディア・リテラシー教育研究から派生するかたちで、学校カリキュラムの商業化という現象にも注目しています。この研究の背景には、営利企業が自社の商品・サービスと関連させて開発した教材や授業は「広告」であり、教育の公共性を衰退させるものではないか、という問題意識があります。また、学校が外の世界と連携しようとするとき、ゲートキーパーとしての教員が備えておくべきメディア・リテラシーは何か、ということも追究しています。



末松裕基 准教授
SUEMATSU Hiroki
教育経営学／学校経営学

現代にふさわしい教育や学校のあり方について考えています。“今、私たちはどのような社会に生きているのか？”このような問いを大切にしながら、現代社会の特徴を分析し、その前提を問いつつ、具体的な学校の経営戦略・方策を考え、また、そのさいに必要な教師の学びのあり方、経営者のリーダーシップ開発のあり方を研究しています。

日本にくわえて、イギリスを中心に国際的な学校改革の特徴、教育経営環境の変容にも着目し、そこに見られる教育改革の原理や学校制度、統治スタイルにも関心を持って考察を進めています。

5. 教員からのメッセージ

目的やレベルに関わらず、スポーツに取り組む人々の役に立つ研究に興味のある方、学びの結果を自分自身の技能向上につなげたい方、人とふれあうことが好きで、スポーツを科学することに興味のある方を歓迎します。

(森山進一郎)

近年法律で明記されるに至った学校司書の専門性を高めることも目指しています。これから学校司書を目指す方だけでなく、現職の方も大歓迎です。

(前田稔)

既存を疑い、受動的ではなく、能動的に、自分の未来を自分の手で創造してほしいと思います。

(露木信介)

希望する研究領域の最前線を“ナビゲーション”できる教員／ネットワークを持っている教員”のもとで学べるかがポイントです。大学院説明会等を通して確実な情報収集をしてください。

(加瀬進)

教育をめぐる課題は、誰でも論じられるように見られがちですが、それぞれの背景は錯綜しており、解明することは実は困難です。割り切れない問題がたくさんあります。「わからないから面白い」と思って、一緒に考えてくれる人を歓迎します。

(岩田康之)

「逃さない、手放さない」。人生には学びを深めるための様々なチャンスと出会いがあります。チャンスを逃さず、出会いを手放さないように大切にしたいと私は思っています。また、生きることを豊かに楽しみ、自らWell-Beingを追求することが、より良い支援に繋がると考えています。

(梅山佐和)

現場がある研究対象であれば、面倒くさがらず実際に足を運んでほしい。必ず発見がある。

(内田賢)

夏休みにおこなっている発掘調査では、地域の人びとや子どもたちと交流をもちながら、自らの考えをどのように伝えていくかということを通して学んでいきます。やる気のある学生を大いに募集しています。

(日高慎)

教育法、学校法、教育行政に関心のある方、また、将来、教育行政等の行政実務の仕事に就きたいと考えている方を歓迎いたします。

(佐々木幸寿)

知的探究・知的好奇心に貪欲な方、メリハリのある方、自らの研究課題、方法に自らの力で粘り強く向き合う方をお待ちしています。これからの社会や教育のあり方を複雑に、粘り強く一緒に考えていきましょう。

(末松裕基)

出会った素材、与えられた素材をいかに活かしてより良いデザインを生み出していくか、最高のパフォーマンスを出すためには具体的に何をどうしたらいいのか？ はじめてのコトは、試行錯誤しながらやるしかない。

(鉄矢悦朗)

修士課程では自分の専門性を伸ばして欲しいと思います。それと同時に既存の学問領域にとらわれない視野や思考を手に入れて欲しいです。

(新免歳靖)



Gakugei

教育の未来構想はじまる
学芸大の新たな修士課程



下記は東京学芸大学 大学院HPからの抜粋です。

令和3年度東京学芸大学大学院教育学研究科（修士課程）入試日程

募集要項発表 令和2年 5月28日(木)

【出願期間】令和2年 9月 1日(火)～ 7日(月)

【試験期日】令和2年10月24日(土)・25日(日)

【合格発表】令和2年11月 6日(金)

【入学手続】令和2年12月10日(木)

大学案内及び学生募集要項等の資料請求について

令和2年6月2日以降受付を開始します。

